http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第１８７９号）

指導資料

鹿児島県総合教育センター
平成28年４月発行

外国語活動　第４号
外国語(英語)

対象校種：幼稚園　小学校　中学校　高等学校　特別支援学校

小・中の円滑な接続を目指す
小学校外国語活動，中学校外国語科の授業設計

小学校と中学校の円滑な接続を通して，外国語によるコミュニケーション能力の基礎の育成につながる外国語活動と，コミュニケーション能力の素地を生かした中学校外国語科における授業づくりの視点や授業展開例について紹介する。

１　外国語活動及び中学校外国語科の目標

外国語教育において，小・中学校の円滑な接続を目指した指導の在り方を考える上で第一に押さえるべきことは，外国語活動及び中学校外国語科の目標を小学校，中学校双方の指導者が理解し合うことである。

外国語活動で育成を目指しているコミュニケーション能力の素地とは，小学校段階で外国語活動を通して養われる「言語や文化に対する体験的な理解」や「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」，「外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」を指しており，これらは互いに不可分に結び付いている。したがって，例えば，音声や基本的な表現の習得に偏重した指導やスキル向上のみを目標とした指導が行われることは，本来の目標とは合致しないこととなる。現在，各学校では，こうした趣旨を踏まえた指導の充実が図られており，以下に示すような児童の特徴が見られるようになった。

- ペアやグループでの活動に慣れている。
- 英語による自己表現に慣れている。
- 限られた表現や語彙でコミュニケーションを図る活動に慣れている。
- 何度も聞いたり言ったりしたことのある表現や語彙が一定量ある。
- 未習の表現や語彙への抵抗感が少ない。

（平成27年度短期研修講座受講者からの聞き取りによる。）

「平成26年度小学校外国語活動実施状況調査」においても，外国語活動導入前と比べ，中学校教員の65.3％が中学校１年生の生徒に「成果や変容がとても見られた」と回答し，その変容した点について，92.6％が「英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」を挙げている。こうした成果を踏まえ，小学校においては，今後もコミュニケーション能力の素地の育成を継続し，充実させていくことが求められる。

一方，中学校外国語科の目標でその中核をなすのは，「聞くこと」，「話すこと」，「読むこと」，「書くこと」などのコミュニケーション能力の基礎の育成であり，外

国語を理解し表現する力の育成が特に重視される。ただし，コミュニケーション能力の基礎の育成は，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことと結び付いていることを踏まえ，中学校においても，生徒が外国語活動を通して身に付けたコミュニケーション能力の素地を十分に生かした指導を心掛けることが大切である。

２　コミュニケーション能力の基礎の育成につなげる小学校外国語活動の授業づくり

(1)　中学校外国語科との接続を意識した音声指導のポイント

外国語活動では，児童が多くの表現を覚えたり，細かい文構造などに関する抽象的な概念について理解したりすることは求めていない。一方，英語特有のリズムやイントネーションに慣れ親しみ体得することについては，児童の柔軟な適応力を生かすことができるとされている。

英語には日本語にない音声があるため，英語の音声に慣れ親しむ過程においては，児童が不完全な発音で発話することは避けられない。しかし，例えば，英語を片仮名と同じように発音したのでは，相手にうまく伝えられなかったり，日本語と英語の音声面の違いに気付く機会を失わせたりすることも起こり得る。

英語特有のイントネーションや発音に慣れ親しませ，体得させるためには，授業の「聞く」活動場面と，「話す」活動場面それぞれにおいて，区別して留意することが大切である。具体的には，「聞く」活動場面では，ネイティブ・スピーカーの生の発音やＣＤ等の音声教材を活用し，児童が正しい発音に触れる機会を多く設定しながら，新しい表現や対話モデルに慣れ親しませることに心掛けたい。一方，「話す」活動場面では，児童の「話したい」という意欲を大切にすることを優先し，性急に正しい発音を求め過ぎないように留意する。また，発音等を修正する際は，意味理解に大きく影響するものを優先するなど，児童の実態に応じて配慮することも大切である。

(2)　活動内容を重視した指導例

中学校外国語科との接続の視点を取り入れた授業づくりのポイントとしては，単位時間ごとの活動内容を，「聞く活動」から「慣れる活動」を経て「言葉を選んで発話する活動」となるよう，児童の実態に即して見直し，ゲームや歌などを効果的に配置することが考えられる。以下にその例を示す。

ア　単元目標と目指す児童の姿の設定例

（題材：“Hi, friends! 1”　Lesson 9）

単元目標	・　欲しいものについて丁寧に積極的に尋ねたり答えたりしようとする。 ・　丁寧な言い方で欲しいものを尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。 ・　世界には様々な料理があることに興味をもち，欲しいものを言ったり尋ねたりする際に，英語にも丁寧な表現があることに気付く。
児童の姿	世界には様々な料理があることを知り，相手意識をもって丁寧な言い方で欲しいものを尋ねたり答えたりしようとする。

イ　単位時間ごとの目標及び活動内容の設定例

時	単位時間の目標	聞く活動	慣れる活動	言葉を選んで発話する活動
1	丁寧な言い方で欲しいものを尋ねたり言ったりする表現を知る。	Let’s Listen 1 Let’s Listen 2 カルタ	歌 Let’s Play キーワードゲーム	

2本時	丁寧な言い方で欲しいものを尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。	Let's Listen 2 ビンゴ	歌 Let's Chant 仲間探しゲーム	
3	世界には様々な料理があることを知り，丁寧な言い方で欲しいものを尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。		歌 Let's Chant ステレオゲーム 集中力ゲーム	Activity 1 Activity 2
4	相手意識をもって，丁寧な言い方で欲しいものを尋ねたり答えたりする。		歌 Let's Chant ミッシングゲーム 集中力ゲーム	Activity 2 「スペシャルランチを作ろう」

ウ　第２時の展開例（「聞く活動」から「慣れる活動」へ）

過程	児童の活動	・　指導上の留意点 ◎　評価規準
導入	1　挨拶 2　歌 3　Let's Listen 2 ・　音声を聞いて食べ物を選ぶ。 4　めあての確認 欲しいものを丁寧な言い方で伝え合おう。	・　外国語活動を行う雰囲気を作る。 ・　単元に関連付ける。 ・　前時の語彙や表現を想起させ，自然な流れで本時の活動につなぐようにする。
展開	5　Let's Chant ・　音声を聞いて一緒に言う。 6　ビンゴゲーム ・　ゲームの方法を理解し，活動する。 7　仲間探しゲーム ・　ゲームの方法を理解し，活動する。（各自が食べ物の絵カードをもち，教室内を動きながら友達とカードのやり取りをする。）	・　児童の実態に応じて，チャンツが言えるようにする。 ・　前時に行ったゲームを活用する。 ・　ゆっくりとデモンストレーションを行うことで，ゲームの方法を児童に推測させる。 ・　勝者だけでなく，ねらいに沿って活動できた児童も褒める。 ◎　丁寧な言い方で欲しいものを尋ねたり言ったりしている。
終末	8　活動の振り返り ・　振り返りカードに記入する 9　挨拶	・　児童の様子等について良かったところを具体的に挙げて確認する。

(3)　学習内容の関連を踏まえた指導

コミュニケーション能力の基礎の育成につなげる更なる工夫としては，学習内容の関連を踏まえた指導が考えられる。

学習内容の関連を踏まえるに当たっては，コミュニケーションの場面や，表現や語彙等の類似点が手掛かりになる。例えば，児童は，Lesson 4，５において，好きな果物やスポーツ，動物，色や形などについて，“What do you like?”などの表現を用いて英語でやりとりする活動を経験している。そこで，(2)で取り上げた単元では，そのときの学習課題や活動，基本的な表現を想起させることにより，指導はより充実したものとなる。

なお，コミュニケーション能力の素地を育む観点から，外国語への慣れ親しみだけでなく，関心・意欲・態度や言語や文化に関する気付きについても留意して指導することが大切である。

３　外国語活動との接続を意識した中学校外国語科における授業づくり

(1)　音声指導及び文字指導例

外国語活動を生かした中学校外国語科の指導のポイントの一つは，音声中心の活動の経験を文字指導に効果的に生かすことである。

中学校では，英語を正確に読んだり，書いたりする力が求められる。外国語活動を経験した生徒は，「聞いて分かる」英語や「話せる」英語が多くなっている。しかし，「話せる」を「書ける」にする前に，「読める」力を付ける指導を十分に行う必要がある。書く活動に先立ち，発音と綴りの関係の指導を丁寧に行うことが，英語に対する苦手意識の高まりを防ぐことにつながることに留意したい。

もう一つのポイントは，文字指導の際に，各表現の形式や単語，働きについて十分に

理解させることである。

外国語活動において，英文は一つの音のかたまりとして扱われる。例えば，“What do you like?”という表現が４語で構成されていることや，全ての語に意味や働きがあるということは指導されない。また，“What would you like?”がなぜ丁寧な表現であるのかに触れられることもない。外国語活動を通して児童が慣れ親しんでいるのは，特定のコミュニケーションの場面においてやりとりされる英語であることを踏まえ，中学校では，各表現の形式，意味，働きを，生徒に実感をもって理解させた上でそれらを運用できる力を育成する必要がある。

(2)　外国語活動の経験を生かした指導例

外国語活動の経験は，中学校において，まとまりのある英語を書く活動に生かすことが可能である。以下は，第１学年における自己紹介の活動例である。

生徒の活動	教師の働き掛け
１　自己紹介で伝えることを決める。	外国語活動で扱われる表現を紹介しながら，小学校での自己紹介を想起させ，メモさせる。
２　メモを基に英語で言う練習をする。	英文を読ませるのではなく，外国語活動で何を伝えていたかを思い出させ，文字に頼らずに言わせる。 内容や伝え方についてペアやグループで互いに助言させる。
３　ペアで自己紹介する。	相手を変えながら，自己紹介の英文がすらすら言えるようにさせる。
４　自己紹介文を書く。	音声で十分に慣れた英文を書かせる。未習の語彙や文型は教科書や辞書，補助資料等を基に書かせる。書き終えたら，生徒同士の相互評価をさせた後に，教師が点検する。
５　自己紹介文を発表する。	英文を読ませるのではなく，暗唱させるかメモを基に言わせるようにする。グループ内であるいは学級全体に対して発表させる。

“Hi, friends!”では，“I can ～.”や“I want to go to ～.”など，中学校初期に指導しない表現も扱われている。ただ，これらを生徒が使いたいと望む場合は，使わせた上で形成的な評価を行うことで，積極的に表現しようとする姿勢を高めたい。

また，英語によるやりとりの経験を文法指導に生かす方法も考えられる。文法をコミュニケーションを支えるものとして捉え，言語活動と効果的に関連付けた指導過程を例示すると次のようになる。

教師の働き掛け	留意点
１　意味伝達を優先した聞く活動を行わせる。	生徒が既習の知識・技能を基にすることで理解可能な情報を与える。
２　新出表現を含んだコミュニケーション場面を提示する。	生徒が既習の知識・技能を基にしながら，特定の新しい文法の形式と意味について気付くことができるようにする。
３　新出表現の形式や意味，用法を理解させる。	説明は必要最小限にとどめ，実際に使わせることを通して理解を深めさせる。
４　新出表現の形式に習熟するための練習をさせる。	新出表現の形式に習熟させるために，正確さに重点を置いて練習させる。
５　新出表現を伴うコミュニケーション活動を行わせる。	知識・技能が必然的に用いられる場面を与え，それらを適切に運用させる。
６　意味伝達に重点を置いたコミュニケーション活動を行わせる。	目標となる言語項目を特定せず，タスク遂行に際して，正確さを過度に求めずに活動させる。

生徒が言語材料を運用できるようになるためには，３，４の活動に終始するのでなく，実際に英語を使い，誤りの修正を繰り返していく過程が不可欠である。１，２，５，６の活動を意図的に取り入れながら継続的に指導するよう心掛けたい。

各学校においては，以上の留意点や指導例を踏まえ，中学校区ごとに指導計画を共有したり，相互に授業参観をしたりするなどして，小，中学校の接続を意識した実践を充実させていただきたい。

－ 引用・参考文献 －

○　文部科学省『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』平成20年８月

○　文部科学省『中学校学習指導要領解説　外国語編』平成20年８月

○　鹿児島県総合教育センター『研究紀要 No. 119』平成27年

（教科教育研修課）